

IFTAミラノ大会に参加して ～投資の最前線～

～はじめに～

プレゼン開始時刻になっても、人は来ない。定刻を15分ほど過ぎて始まったプレゼンも、終了時刻になっても終わらない。「これほど時間にルーズな大会は初めてだ」と思い、ふと会場の外を見ると、一部の参加者は受付嬢を口説いている。「なんて、いい加減なんだ。」とあきれていると、プレゼンターへの質問時間に入るやいなや、沢山の手が上がり、「一人分しか質問時間がない」というアナウンスがあっても、気にせず質問を続ける。

時には、会場の外で熱心に議論を交わす。時間にはルーズでも、興味があるものには徹底的に情熱を傾ける。そのギャップに驚かされた光景です。

この光景は、2017年10月にイタリア・ミラノで開催された国際テクニカルアナリスト連盟(International Federation of Technical Analysis, 以下 IFTA)年次大会での光景です。今回、私は有給休暇を利用して、この大会に参加しました。



大会初日、受付の様子

テクニカル分析とIFTA

テクニカル分析とは、株価・債券価格・為替相場などの取引相場や出来高のデータを使い、トレンドや売り時・買い時などを予測する相場分析手法のことで、経済指標等を用いて予測を行うファンダメンタルズ分析と対比されることが多い手法です。

テクニカル分析で相場予測をしているアナリストをテクニカルアナリストと呼び、IFTAはテクニカルアナリスト達の国際的な民間団体のひとつです。IFTAにはテクニカル分析の普及とクオリティを高めるために、試験制度を設けています。最も上位に位置する試験が、英語による学術論文形式で受験する3次試験です。私は4年前に3次試験に合格し、“Master of Financial Technical Analysis”の資格を取得し、さらに年間最優秀論文賞である“John Brooks Memorial Award”を日本人で初めて



大会パネルの前で記念撮影

受賞しました。以来、自分の知見を広げる目的とネットワーキングを兼ねて、年に1回、世界のどこかで開催されるIFTA年次大会にタイトル・ホルダーとして参加しています。'12年のシンガポール、'13年のサンフランシスコ、'14年のロンドン、'15年の東京、そして昨年はシドニーと、今年のミラノを含めると6回連続の参加となります。

IFTA年次大会について

IFTA年次大会には、証券会社・投資銀行・ヘッジファンドからだけでなく、リサーチ会社・システムベンダー・教育関係等の様々な立場の人達が世界各国から参加します。(今回は300名程の参加者)



‘13年サンフランシスコ大会授賞式でのスピーチの様子

大会では、色々なテーマのプレゼンが行われます。大まかに、①テクニカル分析を用いた金融市場の見通し、②新しい相場分析手法の披露、③その他(システムトレード・リスク管理・時事ネタなど)、の3種類に分けることができますが、その年の大会テーマや金融市場の流行によって、そのウエイトは変わります。例えば、私が初めて参加した2012年シンガポール大会では、①②③がほぼ均等に割り当てられていました。

しかし、今年のミラノ大会は③のウエイトが圧倒的に高い大会でした。ミラノ大会のテーマが“Sailing to the future”ということもあり、これまでの大会でよく見られた自社製品・オリジナルの理論に基づくシステム・トレードに関するプレゼンだけでなく、AI(人工知能)、ビットコインとブロックチェーン関連、行動経済学に関するプレゼンもありました。

また、IFTA大会では、単にプレゼンを聞くだけでなく、普段は会うことができない立場の方々と情報交換を行うチャンスがあります。ミラノ大会でも私は食事やコーヒブレイクの時に、現在の流行について、各国の著名なアナリストやファンドマネージャー達と情報交換してきました。

IFTAミラノ大会で見た

投資の最前線

◎AI(人工知能)、ロボット・トレード、時系列分析

ファッションに流行があるのと同じように、投資の世界にも流行があります。今、ヘッジファンドや投資銀行では、AIを使ったロボット・トレードが流行りです。これは、あらかじめ投資ルールをAIに覚えさせる手法で、人間が取引するよりも早く、かつ迷わない投資判断ができることがメリットです。現在、ヘッジファンドで最も投資パフォーマンスが良いのがロボット・トレードですが、対照的に、昔ながらの凄腕ファンドマネージャーは思ったような成績を残せず、四苦八苦しているとのこと。この結果を受けて、どの会社も精度の高いAIプログラムを作るのに躍起になっています。IFTAミラノ大会では、この『精度の良さ』をいかにアピールするかがポイントになっていました。日本でも、証券会社やFX業者などが売買サポートツールとしてロボ・アドバイザーを提供し始めていることを考えると、とても納得させられる傾向です。

また、このAIの力を最大限に活かすための『時系列分析』も分析の主流になっているとのことでした。ビッグデータ(時には億単位以上の値動きの過去データ)をコンピューターで解析して、値動きの傾向を探るといったものです。

その応用例をひとつ挙げると、テクニカル分析の中には、『こう動いた時、次はこう動く』といった値動きのパターン分析というものがあります。AIにこのような売り時・買い時のパターンを覚えさせ、株価等がそのパターンにはまりそうになったら、売りや買いのエントリーをするといった感じ



コーヒブレイク中の一コマ



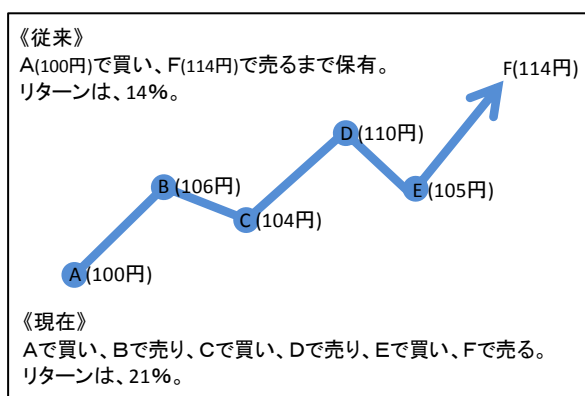
大会会場内の様子。参加者数は約 300 名。

もうひとつの例を挙げると、『自然言語抽出型』トレードもビッグデータの解析結果の賜物です。これは、ニュース内のキーワードを“ポジティブ・ワード”と“ネガティブ・ワード”に分けて、ポジティブ・ワードがニュースで多く出たらリスク・オンの買い、ネガティブ・ワードが多く伝えられたら、リスク・オフの売りといった具合のトレード手法です。現在は『北朝鮮』『ミサイル』といった言葉が、ネガティブ・ワードとされています。

◎投資に対する考え方の変化

投資手法だけでなく、投資に対する考え方も日々変化しています。昔は、値上がりしそうな銘柄を買ったら、目標の値段まで保有し続けるという『バイ&ホールド』投資手法が主流でした。

しかし、今は『売らずにずっと保有し続けるのは、投資効率が悪い』という考え方で、投資対象銘柄を決めたら、値段が上がったら売り、値頃感が出てきたら買い戻す、を繰り返すことが主流となってきています。(下図参照)



また、分散投資の考え方も、『資産の分散』から『テーマの分散』へと変化しており、昔、私が学んだ投資の基本と比較すると、随分変化しているという印象を受けました。

◎ビットコインやブロックチェーン

IFTAミラノ大会では、ビットコインやブロックチェーンについて初めてプレゼンされた大会でもあります。プレゼンの数も複数あったことから、全体的な関心の高さがうかがえました。しかし、どうやらイタリアではビットコインやブロックチェーンといったものは、日本ほど馴染みがある訳ではないらしく、プレゼンの大半は、『ビットコインとは』『ブロックチェーンとは』といった感じの日本という入門編のようなプレゼンが多かったことが印象的でした。

コーヒープレイク中に海外のアナリストから、『ビットコインの1/3は日本で取引されている話は本当か?』『ビットコインは今後、どうなると思うか?』『サトシ ナカモト(ビットコイン論文を書いた方)は女の人か?』といった質問を受けました。日本人と見るや否や、知的好奇心が旺盛な海外勢は自分が納得するまで質問してくるので、満足する回答をするのに四苦八苦しました。

◎多方面から金融市場を分析する

これまでは、株式や為替といった金融市場は、経済指標等で分析する『ファンダメンタルズ分析』と、相場の値動きそのもので分析する『テクニカル分析』とが、分析の両輪と言われていました。

しかし、現在は、これらに加え、コンピューターを使ってより細かい相場の傾向や市場間の相関を分析する『クオンツ分析』と人間の心理・行動をより現実的なモデルを使って分析する『行動ファイナンス』のふたつを加え、多方面から金融市場を分析する必要性が唱えられていました。

◎行動経済学について

ミラノ大会でも、これまでなかった、行動経済学に関するプレゼンが複数ありました。これらは、非常に意義深いもので、アメリカのアナリストが、『経済指標の予想数字が当たっても、その後のマーケッ

トのリアクションが自分の予想と外れたから、儲けられなかった』『ネガティブな材料なのに、何故かマーケットはポジティブに捉えているから不思議でたまらない』といった愚痴をこぼしていたのを思い出させます。すなわち、マーケットの総意が株式市場や為替市場等の取引値ですが、その『マーケットの総意』はどこにあるのかを知っておく必要があることを意味しているのです。

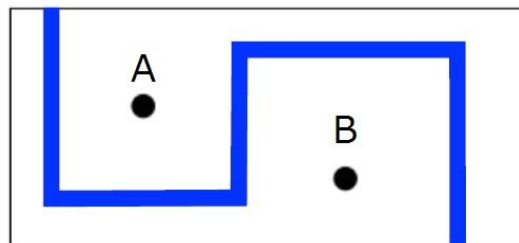
さらに言及すると、インターネットの普及により、情報の共有スピードが上がった結果、昔の『いかに早く経済指標を知るか?』から10年前の『いかに正確に経済指標を予想するか?』に変わり、現在では『いかに、次の可能性を予想するか?』に投資の現場は変わってきている良い例といえます。

おわりに

今回のI F T Aミラノ大会は、投資の現場がダイナミックに変化しているということを印象づける大会となりました。私は、自分を含めアナリストは『不確かな将来に、光明を見出す』ことが業であると思っています。将来を正確に的中することは、誰にもできません。投資もしかりです。『リスクが・・・』という言葉を用いると、折角のチャンスを逃してしまいます。少しでも広い範囲で光明（可能性）を見出せるよう自分を研鑽し続けたい。その思いが、私のI F T A大会参加を後押ししてくれます。来年のI F T A年次大会は、マレーシア・クアランプールで開催されます。1年先の話ですが、待ち遠しくて仕方ありません。

最後に、I F T Aミラノ大会でプレゼンされた、『現在のA Iには解けない問題』を紹介します。

『Q：紙にAとBのふたつの点を書いてあります。太い線に触れずに、点Aと点Bを1本の線でつなぐにはどうしたら良いでしょうか?』



ヒント：直線ではない。

答えは12月25日にホームページに掲載します。

皆さんはわかりますか？解けた方はA Iよりも優れた頭脳を持っています！

ちなみに私は解けませんでした。

岐阜信用金庫 国際業務部
酒井慶喜